

Title	慶應義塾の第二外国語教育における高校・大学の連携についての意識調査：フランス語とドイツ語に関する調査結果の概要と分析
Sub Title	An attitude survey of French and German learners on the coordination between Keio high schools and university : a summary and analysis of the results
Author	治山, 純子(Haruyama, Junko) 平高, 史也(Hirataka, Fumiya) 境, 一三(Sakai, Kazumi)
Publisher	慶應義塾大学外国語教育研究センター
Publication year	2014
Jtitle	慶應義塾外国語教育研究 (Journal of foreign language education). Vol.11, (2014.) ,p.137- 176
JaLC DOI	
Abstract	This article reports on the results of a questionnaire survey targeting university students who studied French or German as a second foreign language (L3) before entering Keio University. The freshmen and sophomores in the L3 classes (which included Chinese and Spanish along with French and German) and university professors and high school teachers in charge of the classes participated in the survey. The survey investigated their awareness and attitude towards coordination between high schools and universities. In this article, we focused on the responses of the students who took French and German. The valid responses provided by students were 120 in French, and 51 in German. Some similarities were observed between the students studying French and German. First, the students attached great importance to the role of culture in their choice of language for study. Second, the university students tended to place great value on all four skills: listening, reading, writing, and speaking. The questionnaire survey revealed that many students think that it is better to have classes only for experienced learners (i.e., those who have already studied the language), and that they would appreciate such classes. The results of this study can be used to develop teaching materials and a curriculum that bridge high school and university education.
Notes	調査・実践報告 挿図
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AA12043414-20140000-0137

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

慶應義塾の第二外国語教育における 高校・大学の連携についての意識調査

— フランス語とドイツ語に関する調査結果の概要と分析 —¹⁾

治 山 純 子
平 高 史 也
境 一 三

Abstract

This article reports on the results of a questionnaire survey targeting university students who studied French or German as a second foreign language (L3) before entering Keio University. The freshmen and sophomores in the L3 classes (which included Chinese and Spanish along with French and German) and university professors and high school teachers in charge of the classes participated in the survey. The survey investigated their awareness and attitude towards coordination between high schools and universities. In this article, we focused on the responses of the students who took French and German. The valid responses provided by students were 120 in French, and 51 in German.

Some similarities were observed between the students studying French and German. First, the students attached great importance to the role of culture in their choice of language for study. Second, the university students tended to place great value on all four skills: listening, reading, writing, and speaking.

The questionnaire survey revealed that many students think that it is better to have classes only for experienced learners (i.e., those who have already studied the language), and that they would appreciate such classes. The results of this study can be used to develop teaching materials and a curriculum that bridge high school and university education.

1. はじめに

本稿は、第二外国語教育における高校・大学の連携を視野に入れた、大学における学習環境および教学体制の検討材料とするために、慶應義塾大学入学以前に第二外国語を学習した経験

を持つ大学生を対象として実施した、フランス語・ドイツ語・中国語・スペイン語のアンケート調査のうち、フランス語とドイツ語に絞ってその概要と基本的分析結果を報告するものである²⁾。併せて、今後の研究の展望を記し、アンケート結果を反映させた実践の可能性について論じる。

2. 研究の概要

本節では、研究の背景、慶應義塾における一貫校教育について説明を行い、調査の概要を記す。

2.1 第二外国語教育の現状と研究の背景

大学における第二外国語の学習者は圧倒的多数が初学者であり、カリキュラムも一年次から初級教育を行うことを念頭に置いた設計が中心となっている。

これに対して、大学入学以前に学習経験を持つ者については、いわゆる「既習者クラス」などで対処しているが、学生数全体に占める割合が低いこともあって、その位置づけや教学方法について、現状では議論が尽くされているとは言い難い。

しかし、大学における初級からの第二外国語教育では、入学前に基礎が一通り終了している英語などに比べ、卒業時までには費やすことのできる時間が少なく、必ずしもすべての学習者が一定の運用能力を身につけることができる環境にあるわけではない。

そうした中で、入学以前に学習経験のある者は、大学と合わせれば総体でかなりの時間が確保され、卒業時までには高度な運用能力を身につける可能性を持った貴重な存在であり、彼らに対してより適切なカリキュラムを設計する必要がある。

本調査は、上記の問題意識から、慶應義塾における第二外国語教育の一貫性を高めるための議論の基礎となるデータを収集するために行われた。

2.2 慶應義塾一貫教育校

大学入学以前に第二外国語を学習した経験を持ち、「既習者クラス」に入る大学1年生・2年生には、当該言語の使われる国・地域の帰国者・在住経験者や、第二外国語の授業が設置されている慶應義塾以外の学校の出身者等も含まれるが、慶應義塾大学の場合は一貫教育校で1年ないし2年学んだ者が圧倒的多数を占める。

したがって、第二外国語教育における高校・大学の連携と、大学側の既習者の学習環境および教学体制の検討は、慶應義塾の場合、実質的に一貫教育校と大学との問題となる。

2.3 調査の概要

以下に、アンケートの実施時期と被験者、分析手法、学生向けのアンケートの質問票の概要を記す。

2.3.1 実施時期と被験者

アンケートの実施時期は、2012年12月から、2013年1月である。対象者は、慶應義塾大学日吉キャンパスにおいて1年生・2年生を対象に設置されているドイツ語・フランス語・中国語・スペイン語のいわゆる「既習者クラス」に所属する学生で、647人である。そのうち、有効回答（完全回答）は、358人から得た。これは、対象者の55%に当たる。

2.3.2 手法

学習者の属性以外の質問項目に関しては、5段階のスケール尺度（5：あてはまる～1：あてはまらない）を用いた。各質問項目を他のものと比較する際には、平均と標準偏差を用いて、上位項目と下位項目を抽出した。

上位項目は、 $\mu + \sigma$ （平均＋標準偏差）が、5付近となる値であるとみなす。点数を高くつける人の意識を表わしており、値が大きくなる程、ポジティブな解答をしている人が多いと言える。（数値5以上は天井効果となる。）

下位項目は、 $\mu - \sigma$ （平均－標準偏差）が、1付近となる値であるとみなす。点数を低くつける人の意識を表しており、値が小さくなる程、ネガティブな解答をしている人が多いと言える。（数値1以下はフロア効果となる。）

また、必要な場合には、円グラフで割合を提示した。

2.3.3 学生向けのアンケート質問票の概要

学生向けのアンケートの質問の概要は、以下の通りである。

- ① 属性
- ② 高校・大学の連携（S12）³⁾
- ③ クラスの現状（S13～S16）
- ④ 授業に対する要望（S16～S17）
- ⑤ 高校履修開始時の意識に関する質問
 1. 当該外国語の選択理由（S18～S22）
 2. 大学までの同一言語の継続学習の意思（S23）
 3. 習得を重視した能力（4技能）（S24～27）

- ⑥ 高校卒業時の意識に関する質問・卒業時に習得した能力（4技能＋文化の説明）（S28～S31）
- ⑦ 大学入学時の意識に関する質問
 - 1. 学習を継続した理由（4技能＋文化の知識）（S32～S36）
 - 2. 学習を継続した上記以外の理由（S37～S38）
- ⑧ 学習環境改善のための提案（S39～S40）
- ⑨ 気づき（S41～S44）

3. フランス語に関する、高校・大学の連携に関する意識調査結果の報告

北山（2010）は、中等教育におけるフランス語などの外国語教育では、その後どのようにしてその言語の教育を大学で継続発展させていくかを考えることが重要であるとし、高大の教育担当者同士の情報交換会や研究会の頻度を増やすべきであると述べている。

田口（2013）は、高大連携が双方にメリットがある点を強調している。高校側としては、才能ある高校生が、さらに能力を高められることとなり、大学側としては、高校の実態を知ること、入学者に対して初年度教育をどのように行うと効果的なのかを知ることができると主張している。

また、Lee and Henning（1999）は、大学と地域の中学校・高校の教育連携について論じ、実践の結果、学生から、異なる教授法で教わることに最初は戸惑うが慣れると、高大の教員から教わることは、肯定的に評価できるという意見が得られたことを報告している。また、教員も、チーム・ティーチングを行うことで互いに知的な刺激が得られ、さらには高大の教員が様々な意見を交換することで連携がより良いものになるといった、チーム・ティーチングの利点についても述べられている。

このように近年重要性が説かれている、高大連携に関して、フランス語教育における意識調査の結果に基づき、考察する。

3.1 被験者の属性

学生のアンケート回答者は120人である。学部の内訳は表1に記すとおりである。経済学部の学生のデータが一番多い。学年の内訳は表2の通りである。1年生と2年生がほぼ半々である。

表１：所属学部

	人 数	パーセント
文 学 部	15	12.5
経 済 学 部	43	35.8
法学部法律学科	12	10.0
法学部政治学科	28	23.3
商 学 部	3	2.5
理 工 学 部	19	15.8
合 計	120	100.0

表２：学年構成

	人 数	パーセント
1 年	61	50.8
2 年	58	48.3
4 年	1	0.8
合 計	120	100.0

また、当該言語の学習開始時期は以下の通りである。高校生から始めた学習者の割合が7割以上と、最も多い。

表３：学習開始時の学年

	人 数	パーセント
小学校入学前	2	1.7
小学1～4年生	8	6.7
小学5～6年生	9	7.5
中 学 生 か ら	13	10.8
高 校 生 か ら	88	73.3
合 計	120	100.0

これらの被験者が、高大連携についてどのような意識を持っているのかについて調査した、アンケートの結果を以下に記す。

3.2 フランス語に関する意識調査

高大連携の意識を問う設問のうち、本節では、第3節で掲げたアンケート質問票のうちS12からS15、S18からS39までの項目に関する結果を提示する。

その際、特に、「3. 高校の履修開始時」、「4. 高校卒業時」、「5. 大学入学時」の3時点における第二外国語学習に対する学習者の意識の相違点に注目する。そして、その傾向から、高大連携のあり方について考察することとする。

3.2.1 高大連携の意識とクラスの現状・授業に対する要望

本節では、「1. 高校・大学の連携」と「2. クラスの現状・授業に対する要望」の結果を提示する。回答は、「あてはまる」「どちらかというにあてはまる」「どちらともいえない」「どちらかというにあてはまらない」「あてはまらない」の5段階による記入を求めた。本稿における図では、各々5, 4, 3, 2, 1と記すこととする。また、「あてはまる」と「どちらかというにあてはまる」を合わせて「ポジティブな回答」とし、「どちらかというにあてはまらない」と「あてはまらない」を合わせて「ネガティブな回答」とする。

3.2.1.1 高大連携の意識とクラスの現状・授業に対する要望の結果

「1. 高校と大学の授業で連携がとれている」という設問の回答を、図1に記す。ネガティブな回答をした学生が58%と多い。

「2. クラスの現状・授業に対する要望」に関しては、既習者クラスの存在の評価、高大の難易度の差異、達成レベルに関する結果を記す。まず、「S13. 大学で既習者クラスがあったほうがよい。」に対する回答は、図2に記すとおりである。ポジティブな回答をした学生が84%と非常に多く、既習者クラスがあることは高く評価されている。

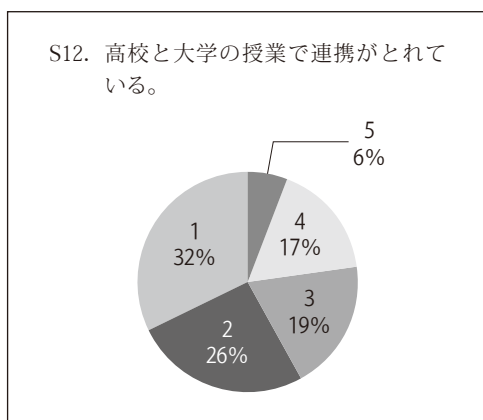


図 1：高大連携に関する意識（仏）

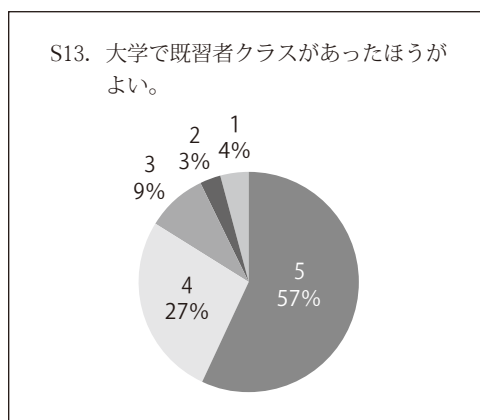


図 2：既習者クラス（仏）

「S14. 大学の授業のほうが高校の授業より簡単だ。」「S15. 既習クラスで勉強していれば、より高いレベルまで到達できる。」という項目に関する回答を図 3 と図 4 に提示する。大学の授業のほうが高校の授業より難易度が高いと考えている学生のほうが、そのように考えていない学生より多い。また、6 割近い学生が、既習者クラスで学習することにより、達成レベルが高くなると評価していることが分かる。

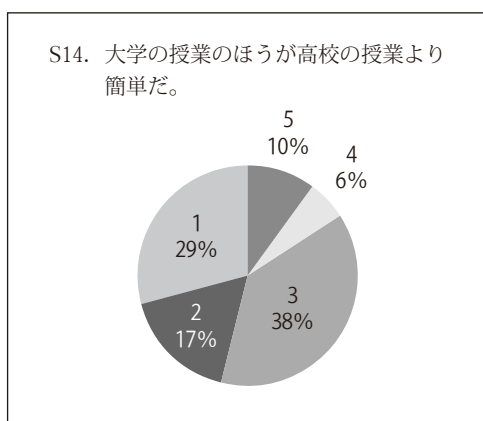


図 3：授業の難易度（仏）

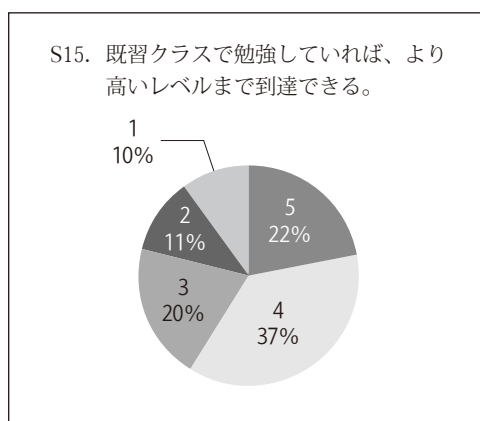


図 4：レベルの到達（仏）

3.2.1.2 高大連携の意識とクラスの現状・授業に対する要望の結果のまとめと考察

高校と大学の授業で連携がとれていないと考えている学生が半数を超え、とれていると考えている学生は、2 割強にとどまる。

既習者クラスの是非に関しては、上述の通り、評価する学生が多く、質的にも高レベルまで達成できると考えており、学生は、既習者クラスを有意義なものであると評価している。

既習者クラスにおいては、学生が高校で何を学んできたかを把握することが必要となる。高評価を得ている既習者クラスをより充実したものとするためには、高大連携を促進することが望ましかろう。そのためには、高校・大学の教員が話し合いを進め、連携をとって、シラバスやカリキュラム作りなどで協力することが必要であると思われる。

3.2.2 高校履修開始時の意識

次に、高校履修開始時の意識に関する質問の結果を挙げ、考察する。本節の「③ 高校履修開始時の意識」と、後述する「④ 高校卒業時の意識」、「⑤ 大学入学時の意識」に関しては、基本的に上位項目を抽出して提示することとする。上位項目とは、平均と標準偏差により5段階のスケール尺度（5：あてはまる～1：あてはまらない）において、「平均＋標準偏差」を指し、点数を高くつける学生の意識を表わすものである。

まず、「当該外国語の選択理由（S18～S22）」を提示し、「大学まで同一言語の継続学習の意思（S23）」、そして「習得を重視した能力（4技能）（S24～S27）」の結果を記す。

3.2.2.1 高校履修開始時の意識：当該外国語の選択理由

「当該外国語の選択理由（S18～S22）」の設問は、以下の通りである。

- S18. 高校で英語以外の外国語を選択した理由は、他の外国語よりも興味深いと思ったからである。
- S19. (・・・)⁴⁾ その言語が使用されている地域の文化に興味があったからである。
- S20. (・・・) 他の外国語よりもやさしそうに思えたからである。
- S21. (・・・) 他の外国語よりも役に立ちそうだからである。
- S22. (・・・) 選択した言語を話す人々とコミュニケーションをとりたかったからである。

3.2.2.1.1 高校履修開始時の意識：当該外国語の選択理由の結果

結果は、図5に記すとおりである。

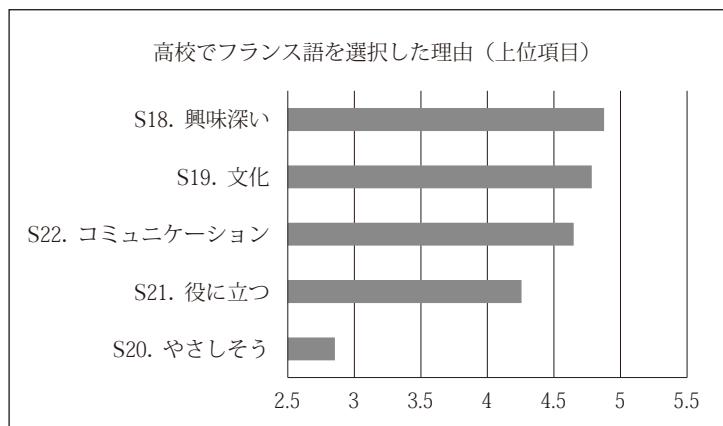


図5：高校履修開始時選択理由（仏）

以下に、各質問項目における、回答の内訳を円グラフにて記す。

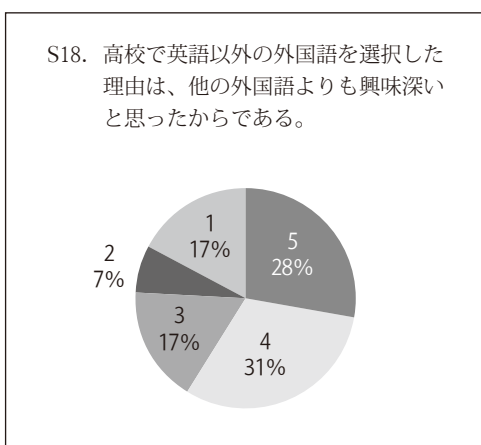


図6：選択理由（興味深い・仏）

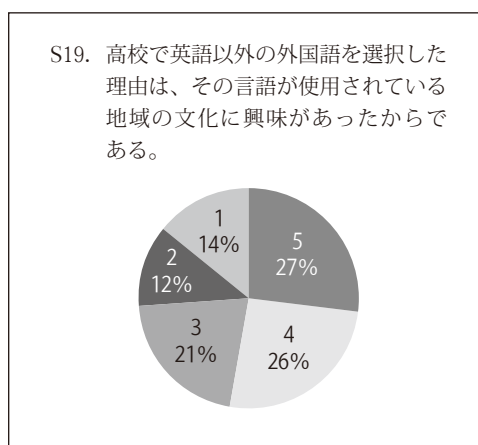


図7：選択理由（文化・仏）

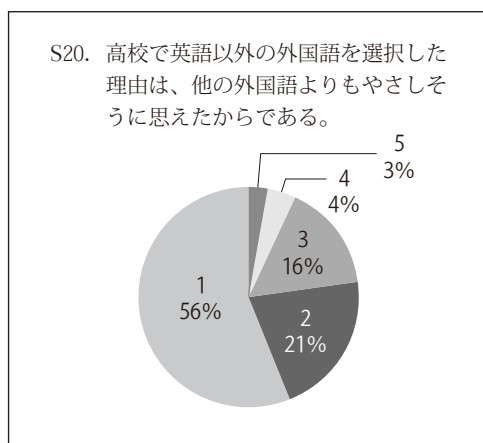


図8：選択理由（やさしそう・仏）

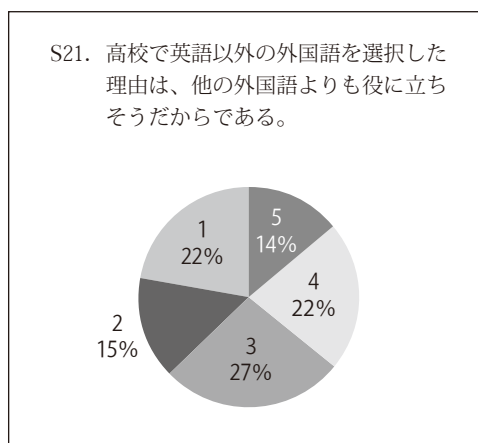


図9：選択理由（役に立つ・仏）

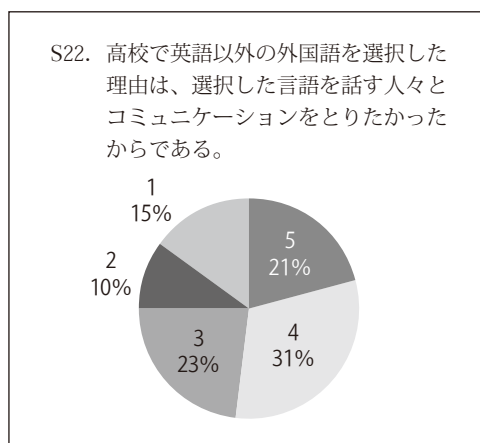


図10：選択理由（コミュニケーション・仏）

3.2.2.1.2 高校履修開始時の意識：当該外国語の選択理由の結果のまとめと考察

「興味深い」という一般的な項目を除けば、「文化」への関心が一番高い。言語のみならず、当該言語が話されている地域の文化などに、幅広い興味が見られる。他言語との比較においては、中国語に見られる、「役に立つ」という実用面を選択理由とする学習者は少ない（ドイツ語は下位、スペイン語は上位には来ていない）。また、これはどの言語にも共通する点であるが、フランス語に関しても「やさしそう」という消極的な理由では、履修開始時の言語の選択を行っていないことが分かった。

3.2.2.2 高校履修開始時の意識：大学まで同一言語の継続学習の意思

「大学まで同一言語の継続学習の意思（S23）」に関しては、図11のような結果となった。ポジティブな回答をした学習者は、77%にのぼる。継続意思のある学習者の割合は非常に高い。

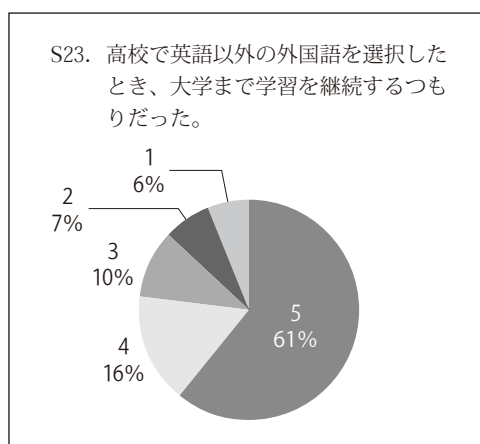


図11：継続の意思（仏）

3.2.2.3 高校履修開始時の意識：習得を重視した能力

最後に、「高校履修時に習得を重視した能力（S24～S27：4技能）」を挙げる。設問は以下の通りである。

S24. 高校での履修開始時、読む能力の習得を最も重視していた。

S25. (・・・)⁵⁾ 書く能力の習得を最も重視していた。

S26. (・・・) 会話・コミュニケーション能力の習得を最も重視していた。

S27. (・・・) リスニング能力の習得を最も重視していた。

3.2.2.3.1 高校履修開始時の意識：習得を重視した能力の結果

結果は、図12に記すとおりである。

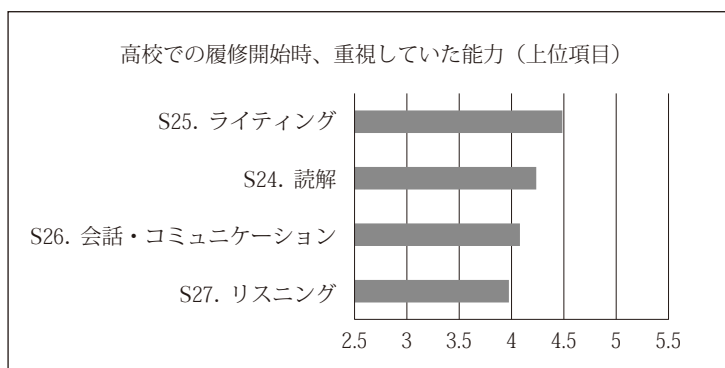


図12：高校履修開始時、重視した能力（仏）

以下に、各質問項目における、回答の内訳を円グラフにて記す。

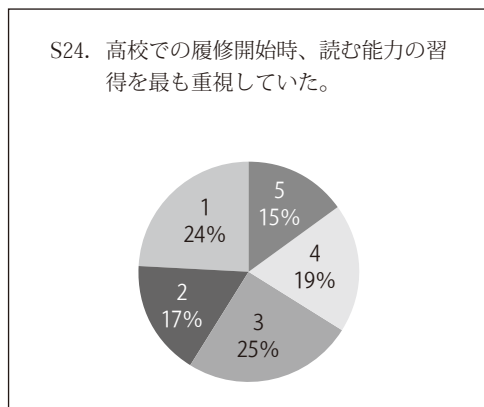


図13：重視した能力（読解・仏）

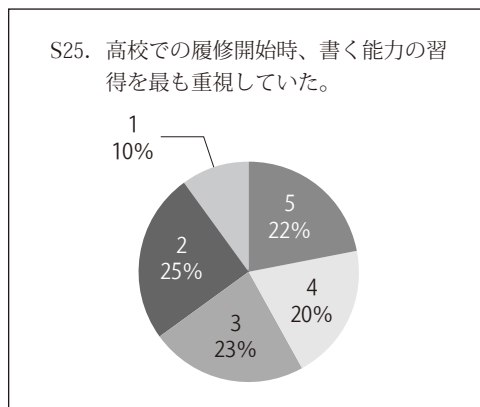


図14：重視した能力（ライティング・仏）

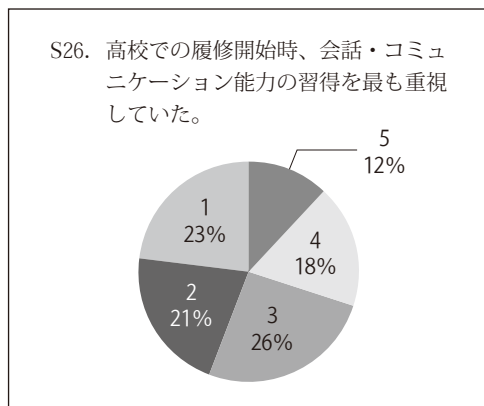


図15：重視した能力（会話・仏）

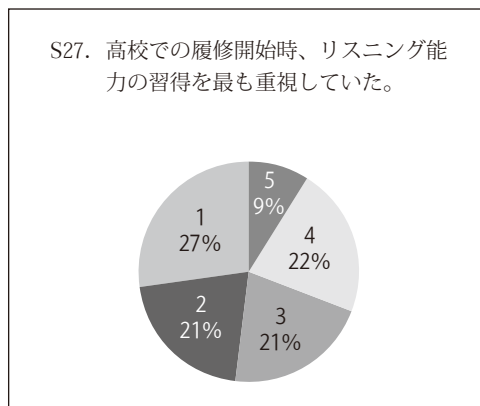


図16：重視した能力（リスニング・仏）

3.2.2.3.2 高校履修開始時の意識：習得を重視した能力の結果のまとめと考察

4技能のいずれにもある程度、平均的に関心を持たれていると言える。ポジティブな回答をした学習者が「ライティング」は42%と多めだが、あとは「読解」は34%、「会話」は30%、「リスニング」は31%と大差ない。

したがって、新しい外国語を学ぶ際には、4技能のうち、どれかの技能だけに特化して学びたいという傾向は見られないことが分かった。

3.2.3 高校卒業時の意識

本節では、「4. 高校卒業時の意識に関する質問：卒業時に習得した能力（S28～S31、4技能および文化の説明）」に関する回答を提示する。設問は、以下の通りである。

S28. 高校を卒業したとき、辞書を用いれば簡単な文を読む能力が身についた。

S29. (・・・)⁶⁾ 辞書を用いれば簡単な文章を書く能力が身についた。

S30. (・・・) 簡単な日常会話を当該言語母語話者とやりとりする能力が身についた。

S31. (・・・) 学習した言語の国や文化について簡単な説明をする能力が身についた。

3.2.3.1 高校卒業時の意識：卒業時に習得した能力（4技能および文化の説明）の結果

高校卒業時に、フランス語で習得できたと考えられている能力は、以下の図の示す通りである。

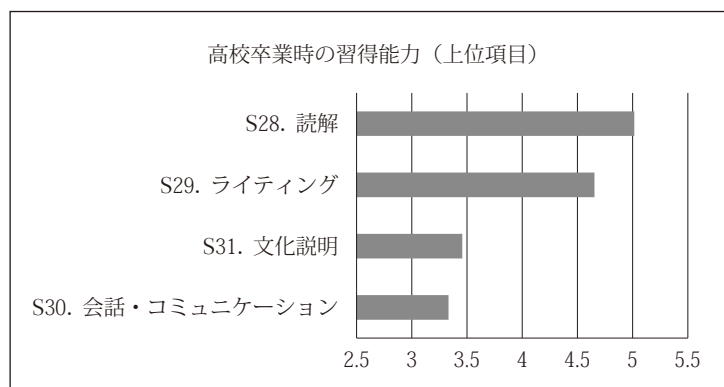


図17：高校卒業時の習得能力（仏）

以下に、各質問項目における、回答の内訳を円グラフにて記す。

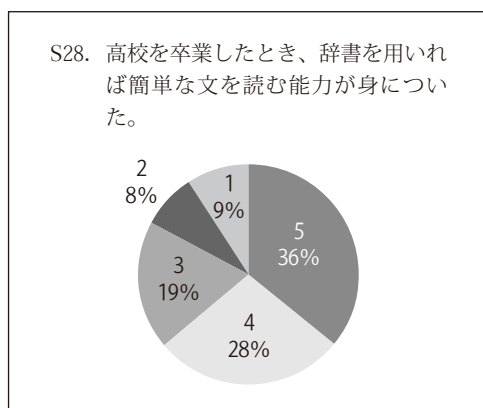


図18：習得能力（読解・仏）

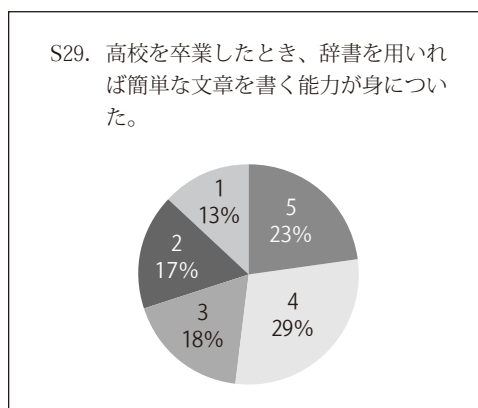


図19：習得能力（ライティング・仏）

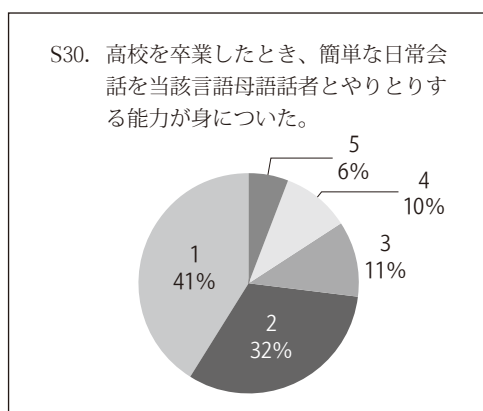


図20：習得能力（会話・仏）

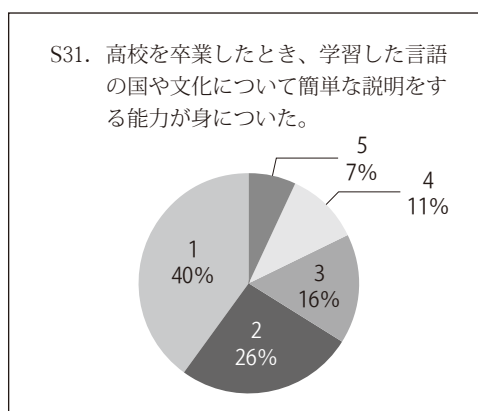


図21：習得能力（文化説明・仏）

3.2.3.2 高校卒業時の意識：卒業時に習得した能力（4技能および文化の説明）の結果のまとめと考察

習得できた能力の上位には、「読解」、「ライティング」が挙げられている。「ライティング」は、履修時に重視した能力として1番関心が高かった。このように重視されている「ライティング」に関しては、「卒業時の習得能力」としても、ポジティブな回答をしている学習者が52%おり、習得できたと自信を持っている学習者が過半数である。

逆に、習得できた能力の下位には、「会話」、「文化の説明」がある。他の技能と同様、履修時に関心が持たれていた「会話」に関しては、ポジティブな回答をした学習者は16%にとどまった。本結果を考慮すると、授業内での「会話」の扱いを増やすことが望ましい。また、文法項目と連続させた形で会話練習を行うにしろ、目標行為を達成するための会話のアクティビ

ティを行うにしろ、内容をより充実化させることも重要であろう。

「履修時の選択理由」として挙げられた「文化への興味」に関わる「文化の説明」であるが、習得できたと述べている学生は少ない。ただ、この点に関しては、本アンケート項目では「文化の説明」がそもそも何を意味するのかが分かりづらかった可能性もあり、今後、質的調査などで明らかにする必要がある。

ただ、アンケート結果を教育に反映させるためには、学習者の言語選択時の興味のある項目の習得に、授業内でより多くの時間を割き、内容的にも充実させることが理想的であると思われる。

3.2.4 大学入学時の意識

本節では、「5. 大学入学時の意識に関する質問」の回答を提示する。「1. 学習を継続した理由（S32～36、4 技能・文化知識の習得）」の設問は以下のとおりである。

S32. 大学に入学したとき、高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、読む能力をさらに高めたいと思ったからである。

S33. (・・・)⁷⁾書く能力をさらに高めたいと思ったからである。

S34. (・・・) 会話・コミュニケーション能力をさらに高めたいと思ったからである。

S35. (・・・) 聞き取る能力をさらに高めたいと思ったからである。

S36. (・・・) その言語が話されている地域の文化についてさらに学習したかったからである。

また、「2. 学習を継続した理由（S37～S38：容易さと実用性）」の設問は以下の通りである。

S37. (・・・) 高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、他の外国語を一から学習するよりやさしそうに思えたからである。

S38. (・・・) 将来、役に立ちそうだからである。

3.2.4.1 大学入学時の意識：学習を継続した理由の結果

「4 技能・文化知識の習得」に関しては、図22の結果となった。

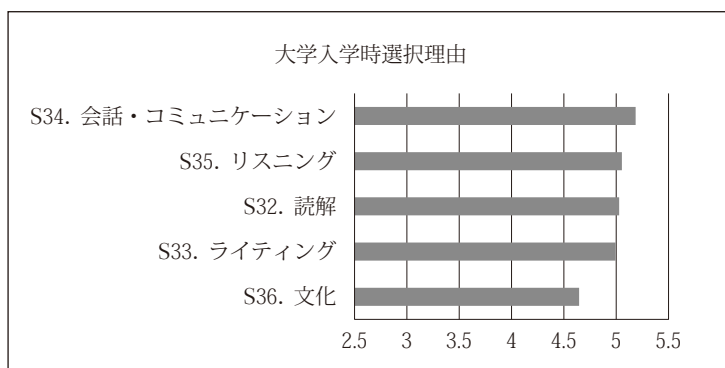


図22：大学入学時選択理由（4技能と文化・仏）

以下に、各質問項目における、回答の内訳を円グラフにて記す。

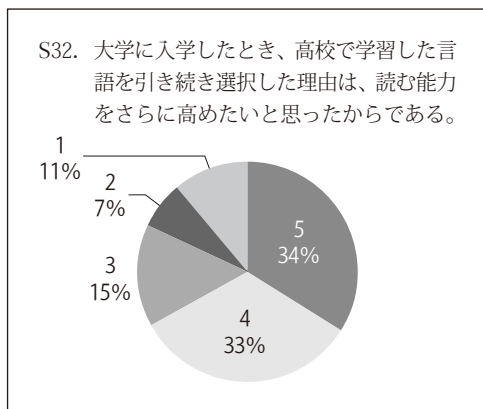


図23：継続の理由（読解・仏）

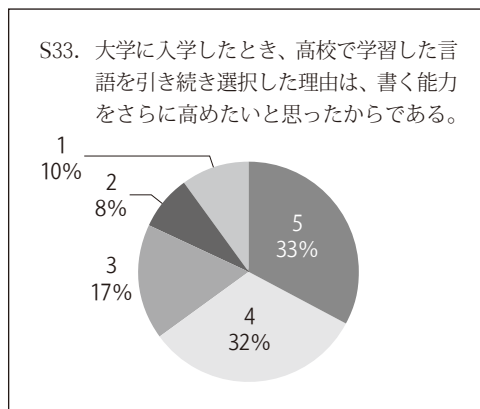


図24：継続の理由（ライティング・仏）

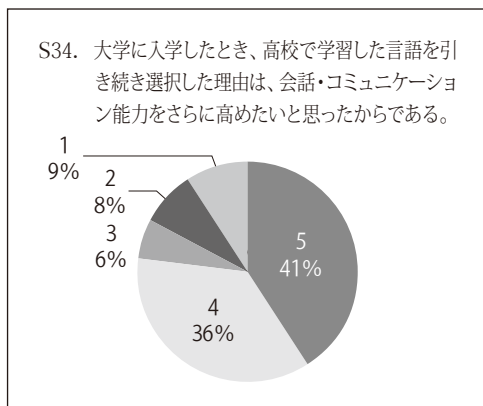


図25：継続の理由（会話・仏）

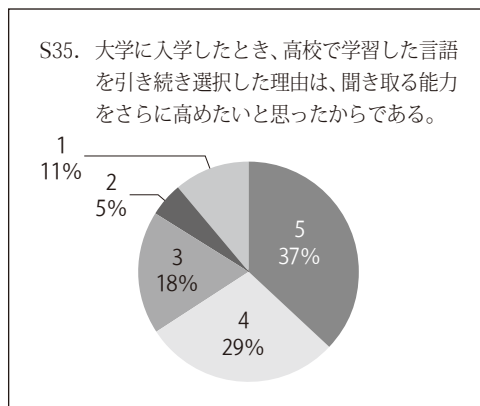


図26：継続の理由（リスニング・仏）

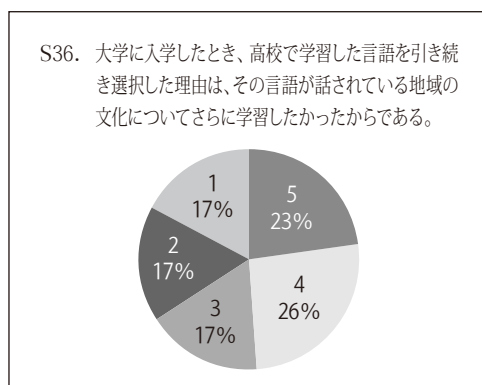


図27：継続の理由（文化・仏）

「容易さと実用性」の結果は図28に記す通りである。

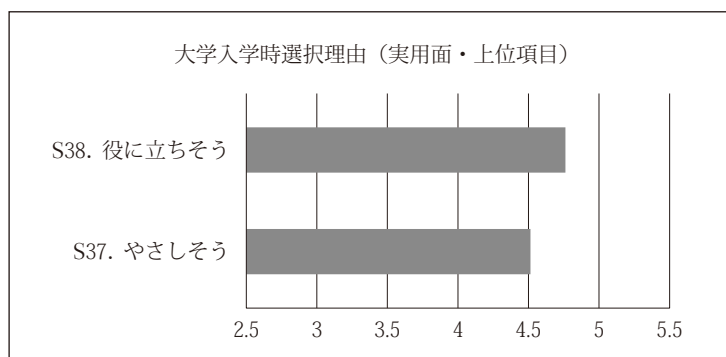


図28：大学入学時選択理由（実用面・仏）

以下に、各質問項目における、回答の内訳を円グラフにて記す。

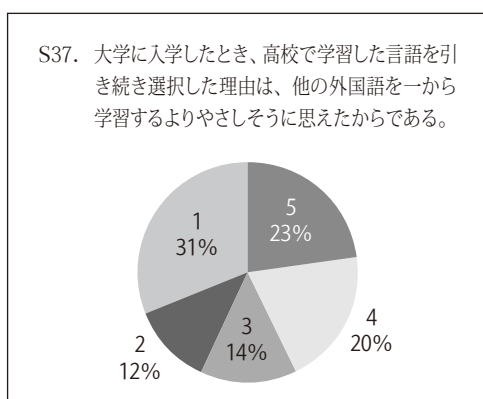


図29：選択理由（やさしそう・仏）

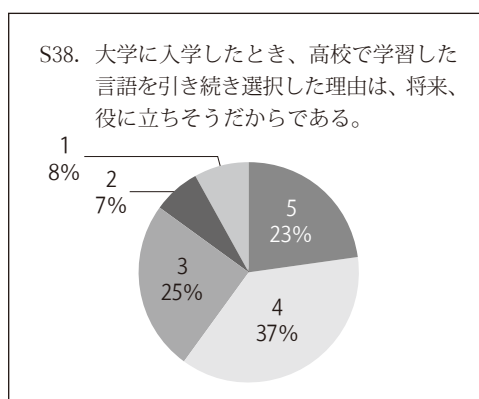


図30：選択理由（役に立つ・仏）

3.2.4.2 大学入学時の意識：学習を継続した理由の結果のまとめと考察

大学入学時の意識としては、4技能全てがかなり重視されていることが分かった。ポジティブな回答をした学生が「会話」については、77%と一番多い。その他は、「読解」が67%、「リスニング」が66%、「ライティング」が65%と大差ないが、どれも高い割合となっている。高校の履修開始時と同様に、4技能のうち、どれかの技能だけに特化して学びたいという傾向はない。

「会話」に関しては、高校卒業時に「会話」能力が習得できたと思っている学習者が少なかったため、大学では習得したいという学習者が多いと考えられる。

「読解」に関しては、高校卒業時に習得できたと回答した学習者が多く、大学でもさらにその能力を向上させたいと考えている。高校での習得が、学習者の自信となり、学習の動機づけになっている可能性がある。

また、「文化への興味」に関しては、約半数がポジティブな回答をしており、高校履修時と同様、大学入学時にも関心が持たれている。

「やさしそう」に関しては、大学入学時には、ポジティブな回答とネガティブな回答がどちらも43%となっているが、詳細を見ると、「5：あてはまる」と答えた人のほうが、「1：あてはまらない」と答えた人より少ない。

最後に、「役立つ」という理由について考察する。高校では、ポジティブな回答をした学習者が36%しかいなかったが、大学では60%見られた。高校履修開始時には、フランス語の活かし方をまだ具体的にイメージできないのかもしれないが、ある程度フランス語に触れた大学入学時には、フランス語をより「役立つ」と捉えていると考えられる。また、高校で学習したことで、自分の言語運用能力に自信が持て、役に立つと思えるようになったことも関わっている。ただ、仕事、留学、研究、趣味など、どの点において「役立つ」と考えているかは、本調査項目にはなかったため不明であり、今後、質的調査により明らかにしていく必要がある。

3.2.5 学習環境改善のための提案

最後に、「6. 学習環境改善のための提案：テキスト」の結果を提示する。「同じ学校だから、高校・大学の第二外国語教育の一貫性を考慮したテキストを、高校や大学の授業で使用してほしい。」という項目への回答を記す。

3.2.5.1 学習環境改善のための提案：テキストの結果

テキストの一貫性の希望に関する結果に関しては、図31に記す。

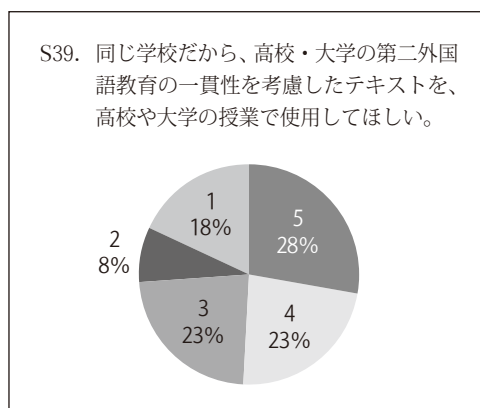


図31：教育の継続性の希望（仏）

3.2.5.2 学習環境改善のための提案：テキストの結果のまとめと考察

半数強の学生が、高大大で、一貫性を考慮したテキストを使用してほしいと考えている。アンケート結果を教育に反映させるには、高校と大学の教員が、協力してテキストの一貫性を考慮した教材を作ることが望ましい。

3.3 フランス語調査結果のまとめ

まず、アンケート結果より判明した、現状を述べ、その課題点を取り上げ、改善策の提案を行う。また、フランス語のアンケート結果において特徴的だった点について考察し、本調査の結果を反映させた学習者の興味・ニーズに合う項目の充実化について考察する。

3.3.1 現状と課題・改善策

本調査の結果より、現状としては、学生は継続学習を意識しており、既習者クラスがあることは望ましいと評価していることが分かった。したがって、高大大間の第二外国語の一貫教育の重要性が、学習者の意識にも見られることが分かった。

課題は、現状では、連携がとられていないと考えている学習者が多いことである。改善策としては、高大大の教員がカリキュラム、教育について共に話す機会を増やすことが挙げられよう。また、第二外国語の一貫教育を意識したシラバスや教材開発を行うことも望ましい。さらには、飯田（2010）においても、その重要性が説かれているように、出張講義も有意義であろう。また、田口（2013）が主張しているように、高大大の教員が取組の主体となる新しい形の高大大連携も利点があろう。そして、大学教員は、高校の授業をさらに発展させた内容を考慮に入れつつ、自身の専門性も活かして、教育を行うことができよう。

また、本塾の一貫教育の場合には事情が異なるが、一般にフランス語など英語以外の外国語の高大連携に関して、大学入試の観点から、山崎（2010）が、中等教育における英語以外の外国語の教育の存続には、大学入試が英語以外の外国語の試験を維持することが必須であると主張している。また、水林（2010）は、2つ目の外国語を学ぶ中高生の努力が報われるような入試のシステムを構想すること、さらには中高生に2つ目の外国語の学習を積極的に奨励するような入試のシステムを各大学が導入することの必要性を訴えている。このように、幅広い文脈で、中等教育における英語以外の外国語の学習が支援されることが望ましかろう。

3.3.2 4言語のアンケート調査結果に見られるフランス語の特異性

4言語の分析において、似通った傾向がみられる中、唯一の明確な相違点は、言語の最初の選択理由であった。フランス語・ドイツ語では、「文化」は上位10項目に入り、ドイツ語では、「役に立つ」は下位10項目に入る⁸⁾。それに対し、中国語・スペイン語では、「文化」は下位であり、中国語では「役に立つ」は上位に位置する。

3.3.3 フランス語の授業での取り組みに関する提案

本調査で明らかになった、学習者の興味・ニーズに合う項目の充実化を図ることが最良であると思われる。フランス語の場合は、中国語・スペイン語と比べても、特に「文化」への興味が高いことがわかった。そこで、フランス語の授業に、文化的側面も十分に取り入れることが、学習者の現在の学習や、今後の（高校生の場合、大学での）継続学習のモチベーションの向上につながると考えられる。

フランスでは、civilisation は、重要な教養の一つと考えられており、FLE（外国語としてのフランス語教育）の教員研修においては、単なるフランス語の統語的・音声的・意味的知識や、教授テクニックのみならず、civilisation を扱う能力を培うことに重点が置かれることも多い。Civilisation の教材も豊富で、映像や文章を通して様々なトピックが紹介されたものが多く見られる。このような教材は、学習者に当該トピックについて議論させたり、自身の国との相違点や共通点を考えさせたりするなど、様々な形で用いることができるものである。

それに、（特に高大連携に関する点ではないが）フランス語学習者のフランス語選択の理由としては、「映画」「歌」「料理」「文学」「ファッション」「絵画」「歴史」といった文化的側面が挙げられることが多い。このように豊かな文化の形態を教師がとりいれ、学習者に適した形で教材を作成することも望ましかろう。

また、学習者は継続学習を望んでいるのであるから、文化面においても、高大連携を意識したカリキュラムや教材など、学習環境の整備ができることが望ましいだろう。高校の時、学習したテーマや扱った問題を踏襲して、つながりを持たせ、興味を持続させ、さらに深く考えさ

せるといった教授法が考えられる。

したがって、基本的な4技能のみならず、文化的側面においても、高大連携を意識した教育を行うことが可能である。各教員の専門知識を持ち寄ることで、教材やカリキュラムの開発に関しても多様な可能性が開けていくであろう。

4. ドイツ語に関する、高校・大学の連携に関する意識調査結果の報告⁹⁾

本節では、ドイツ語教育に関するアンケート結果を提示し、考察する。

4.1 被験者の属性

学生のアンケート回答者は、51人である。学部の内訳は表7に記すとおりである。学年の内訳は表8の通りである。

表7：所属学部

	人 数	パーセント
文 学 部	10	19.6
経 済 学 部	24	47.1
法学部政治学科	1	2.0
商 学 部	2	3.9
理 工 学 部	14	27.5
合 計	51	100.0

表8：学年構成

	人 数	パーセント
1 年	47	92.2
2 年	4	7.8
合 計	51	100.0

また、当該言語の学習開始時期は以下の通りである。高校生から始めた学習者の割合が約8割と、最も多い。

表9：学習開始時の学年

	人 数	パーセント
小学校入学前	1	2.0
小学1～4年生	5	9.8
中 学 生 か ら	4	7.8
高 校 生 か ら	40	78.4
無 回 答	1	2.0
合 計	51	100.0

4.2 ドイツ語に関する意識調査

フランス語と同じ項目に関する結果を提示する。設問の番号もフランス語のものと全て対応している。

4.2.1 高大連携の意識とクラスの現状・授業に対する要望

まず、「1. 高校・大学の連携」と「2. クラスの現状・授業に対する要望」の結果を提示する。

4.2.1.1 高大連携の意識とクラスの現状・授業に対する要望の結果

「1. 高校と大学の授業で連携がとれている」という設問の答えは、図32に記す。ネガティブな回答をした学生が53%と多い。

「2. クラスの現状・授業に対する要望」に関しては、既習者クラスの存在の評価、高大の難易度の差異、達成レベルに関する結果を記す。まず、「S13. 大学で既習者クラスがあったほうがよい。」に対する回答は、図33に記すとおりである。ポジティブな回答をした学生が76%と多く、フランス語の場合と同様、既習者クラスがあることは評価されている。

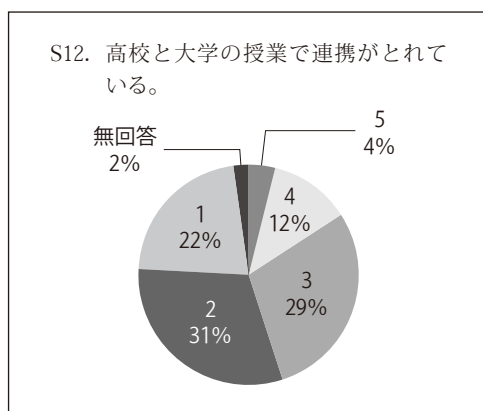


図32：高大連携に関する意識（独）

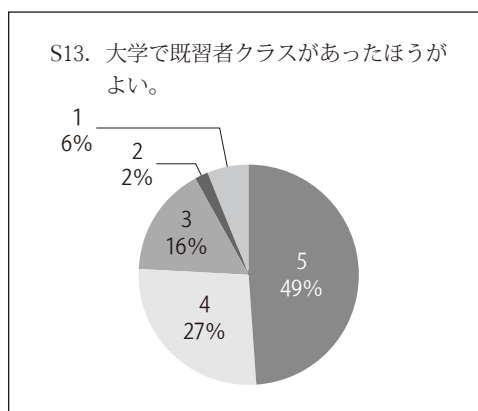


図33：既習者クラス（独）

「S14. 大学の授業のほうが高校の授業より簡単だ。」「S15. 既習クラスで勉強していれば、より高いレベルまで到達できる。」という項目に関する答えを図34と図35に提示する。フランス語の場合と同様、大学の授業のほうが高校の授業より難易度が高いと考えている学生のほうが、そのように考えていない学生より多い。また、47%の学生が、既習者クラスで学習することにより、達成レベルが高くなると答えており、フランス語の場合ほどではないが、レベルの面でも、既習者クラスの存在が評価されている。

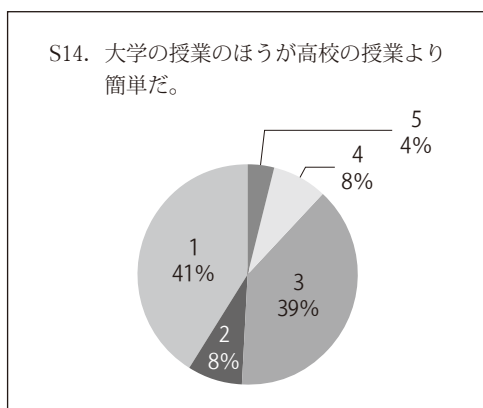


図34：授業の難易度（独）

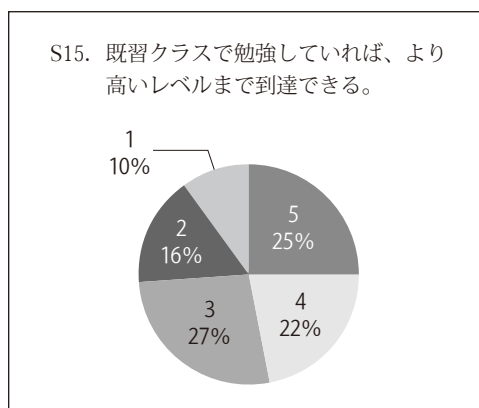


図35：レベルの到達（独）

4.2.1.2 高大連携の意識とクラスの現状・授業に対する要望の結果のまとめと考察

高校と大学の授業で連携がとれていないと考えている学生が半数強おり、とれていると考えている学生は2割に満たない。

既習者クラスについては評価する学生が多く、質的にも高いレベルに達することができると考えている学生は半数近くに上っている。

4.2.2 高校履修開始時の意識

高校履修開始時の意識の結果を挙げ、考察する。

4.2.2.1 高校履修開始時の意識：当該外国語の選択理由

「当該外国語の選択理由（S18～S22）」の結果を記す。

4.2.2.1.1 高校履修開始時の意識：当該外国語の選択理由の結果

結果は、図36に記すとおりである。

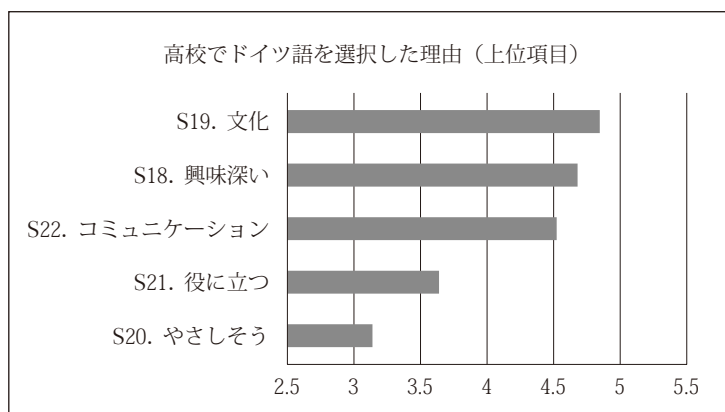


図36：高校履修開始時選択理由（独）

以下に、各質問項目における、回答の内訳を円グラフにて記す。

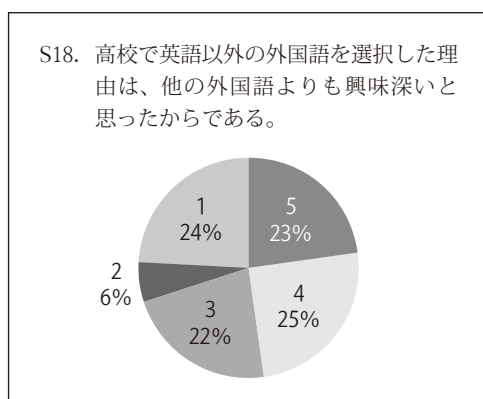


図37：選択理由（興味深い・独）

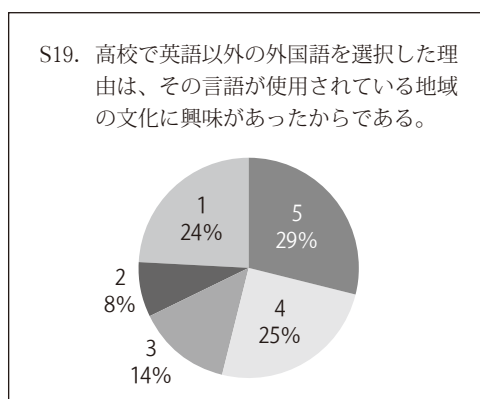


図38：選択理由（文化・独）

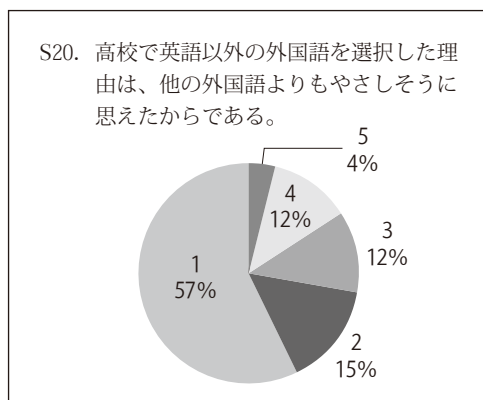


図39：選択理由（やさしそう・独）

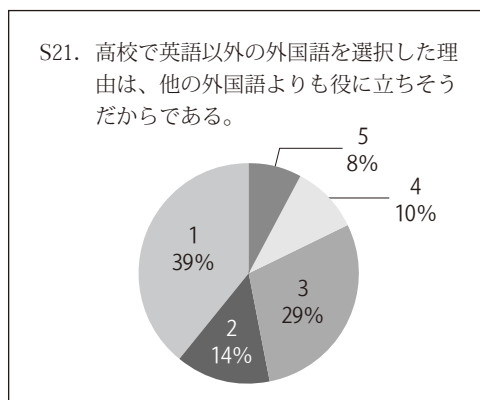


図40：選択理由（役に立つ・独）

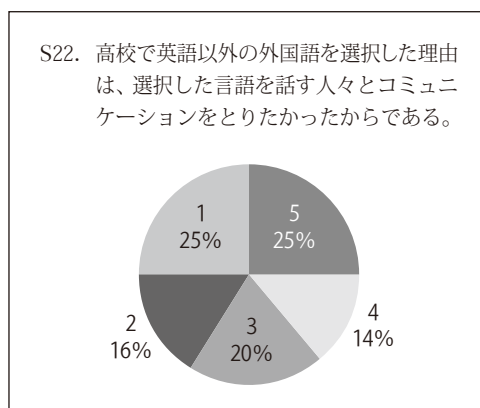


図41：選択理由（コミュニケーション・独）

4.2.2.1.2 高校履修開始時の意識：当該外国語の選択理由の結果のまとめと考察

フランス語と同様、「文化」への関心が高い。「興味深い」以外の4つの理由の順位もフランス語と同じになっている。

4.2.2.2 高校履修開始時の意識：大学まで同一言語の継続学習の意思

「大学まで同一言語の継続学習の意思（S23）」に関しては、図42のような結果となった。ポジティブな回答をした学習者は、63%にのぼる。フランス語ほどではないが、継続意思のある学習者は多く見られる。

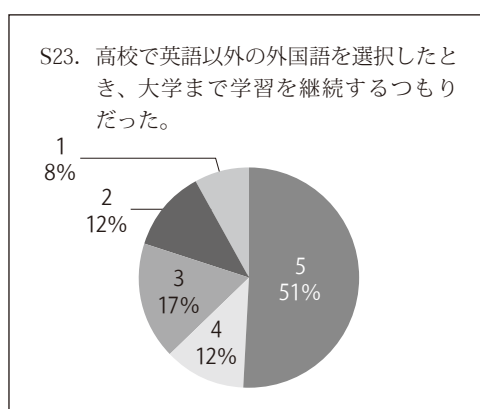


図42：継続の意思（独）

4.2.2.3 高校履修開始時の意識：習得を重視した能力

最後に、「高校履修時に習得を重視した能力（S24～S27：4技能）」を挙げる。

4.2.2.3.1 高校履修開始時の意識：習得を重視した能力の結果

結果は、図43に記すとおりである。

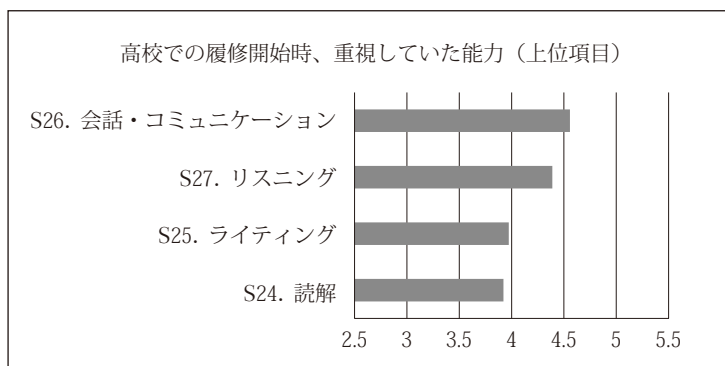


図43：高校履修開始時、重視した能力（独）

以下に、各質問項目における、回答の内訳を円グラフにて記す。

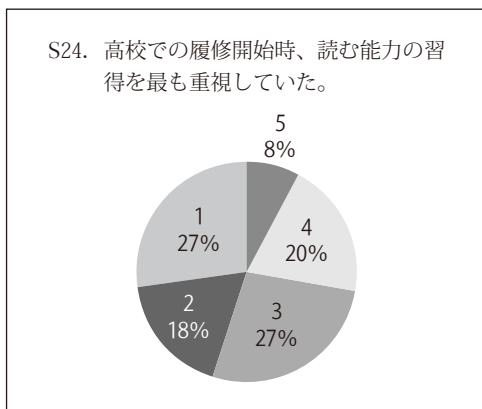


図44：重視した能力（読解・独）

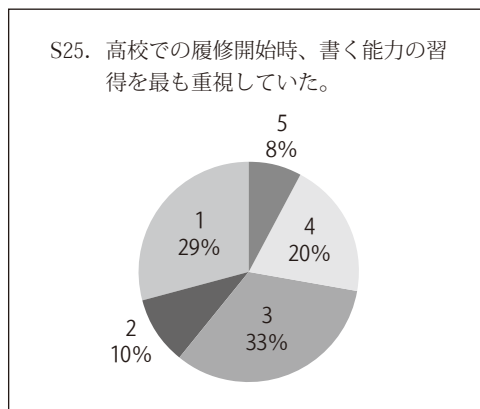


図45：重視した能力（ライティング・独）

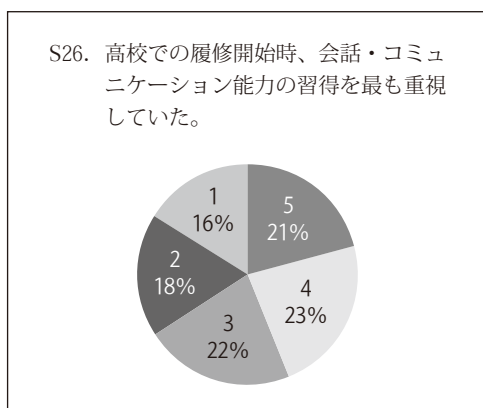


図46：重視した能力（会話・独）

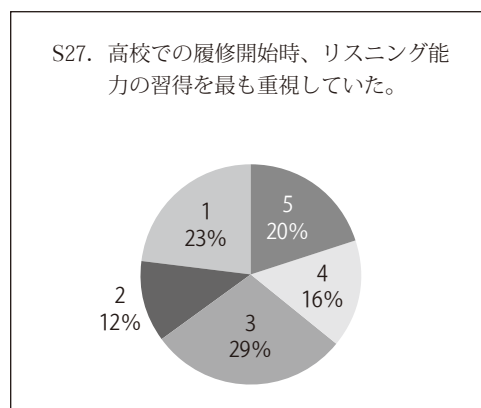


図47：重視した能力（リスニング・独）

4.2.2.3.2 高校履修開始時の意識：習得を重視した能力の結果のまとめと考察

フランス語よりも「会話」「リスニング」というオーラル面がより高い点数となっており、「ライティング」「読解」との差が開いている。ドイツ語では高校で履修を始めたときは、口頭コミュニケーション能力をより重視していたという傾向が見て取れる。

4.2.3 高校卒業時の意識

本節では、「4. 高校卒業時の意識に関する質問：卒業時に習得した能力（S28～S31、4技能および文化の説明）」に関する回答を提示する。

4.2.3.1 高校卒業時の意識：卒業時に習得した能力（4技能および文化の説明）の結果

高校卒業時に、ドイツ語で習得したと考えられていた能力は、以下の図の示す通りである。

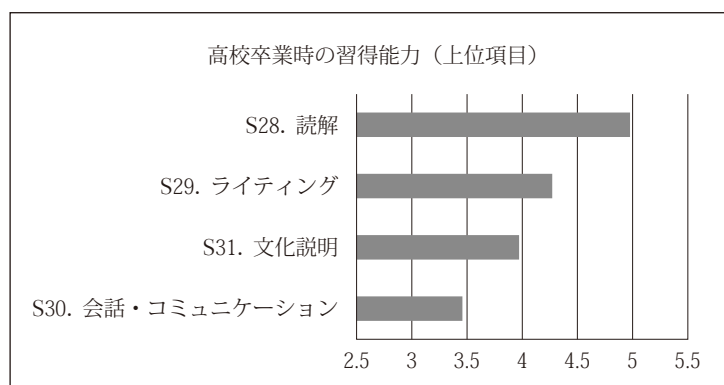


図48：高校卒業時の習得能力（独）

以下に、各質問項目における、回答の内訳を円グラフにて記す。

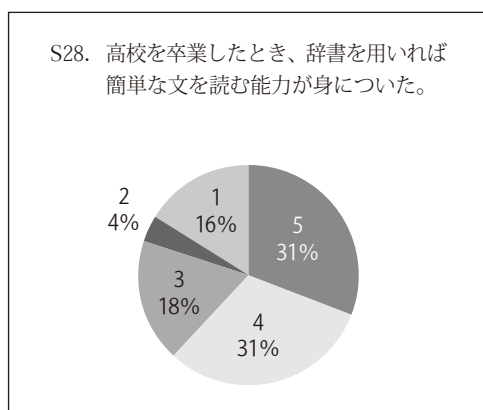


図49：読解（独）

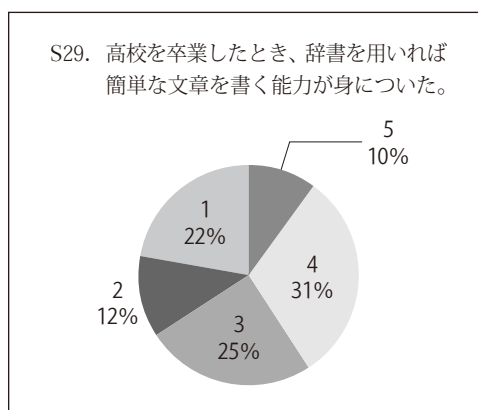


図50：ライティング（独）

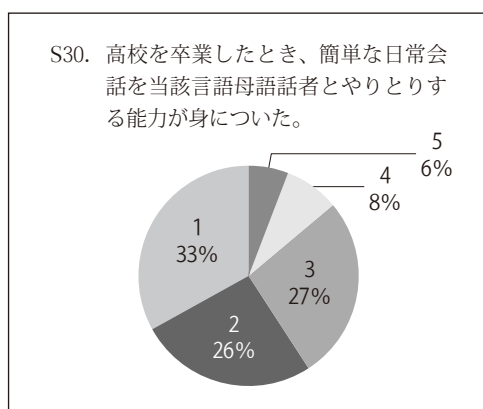


図51：会話（独）

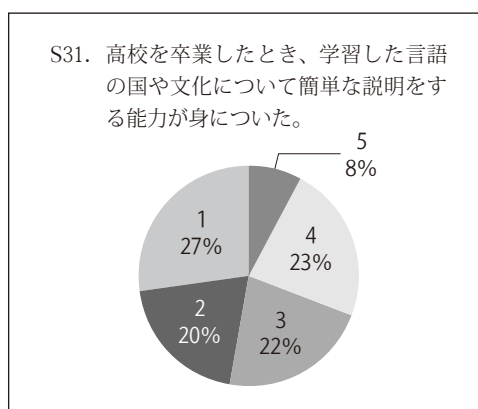


図52：文化説明（独）

4.2.3.2 高校卒業時の意識：卒業時に習得した能力（4技能および文化の説明）の結果のまとめと考察

習得できた能力の上位として、「読解」、「ライティング」が挙げられている。逆に、下位には、フランス語同様、「会話」、「文化の説明」が挙げられている。履修開始時に重視していた「会話」が最も低く、逆に、履修開始時にはそれほど重視していなかった「読解」「ライティング」のほう卒業時に習得した能力としては高い値になっている。生徒の期待に授業が応えられていない様子がうかがえる。

4.2.4 大学入学時の意識

本節では、「5. 大学入学時の意識に関する質問」の回答を提示する。「1. 学習を継続した理由（S32～36、4技能・文化知識の習得）」と「2. 学習を継続した理由（S37～S38：容易さと実用性）」の結果を提示する。

4.2.4.1 大学入学時の意識：学習を継続した理由の結果

「4技能・文化知識の習得」に関しては、図53の結果となった。

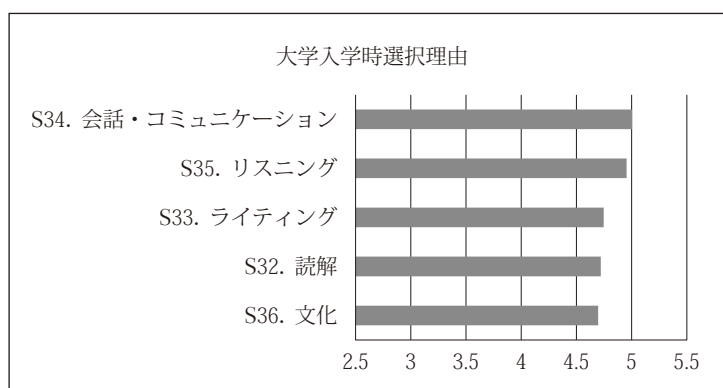


図53：大学入学時選択理由（4技能と文化・独）

以下に、各質問項目における、回答の内訳を円グラフにて記す。

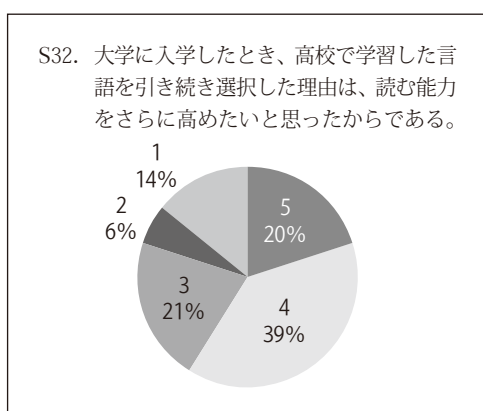


図54：継続の理由（読解・独）

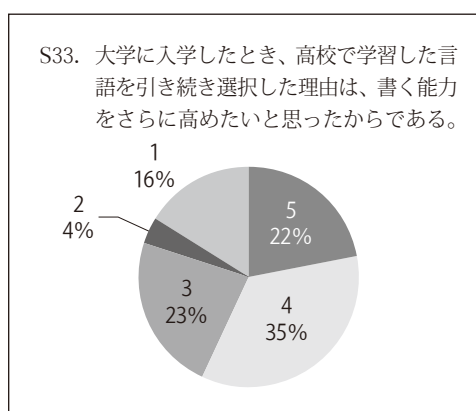


図55：継続の理由（ライティング・独）

S34. 大学に入学したとき、高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、会話・コミュニケーション能力をさらに高めたいと思ったからである。

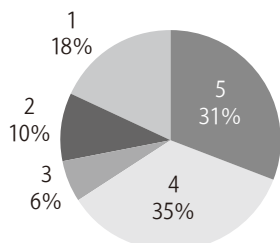


図56：継続の理由（会話・独）

S35. 大学に入学したとき、高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、聞き取る能力をさらに高めたいと思ったからである。

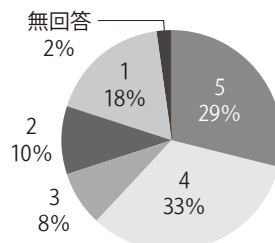


図57：継続の理由（リスニング・独）

S36. 大学に入学したとき、高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、その言語が話されている地域の文化についてさらに学習したかったからである。

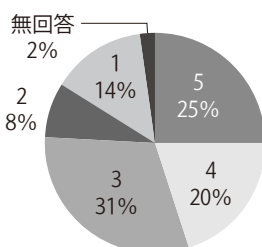


図58：継続の理由（文化・独）

「容易さと実用性」の結果は図59に記す通りである。

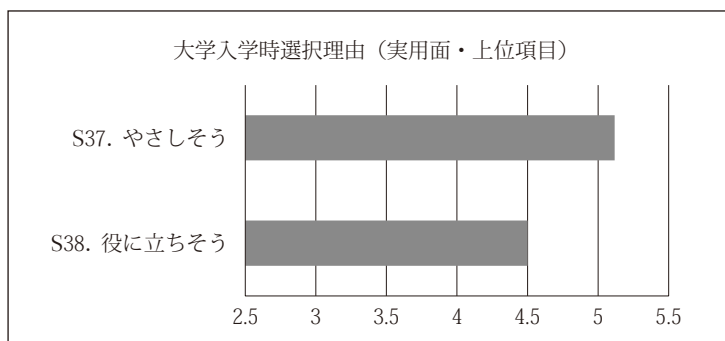


図59：大学入学時選択理由（独・実用面）

以下に、各質問項目における、回答の内訳を円グラフにて記す。

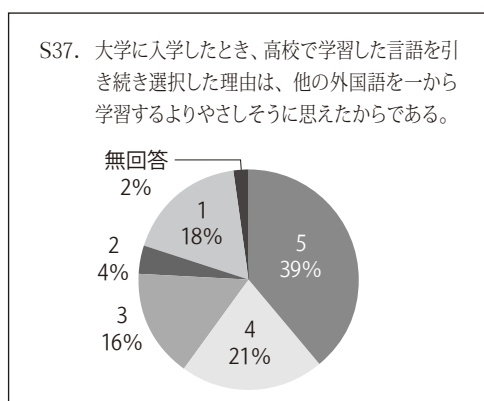


図60：やさしそう（独）

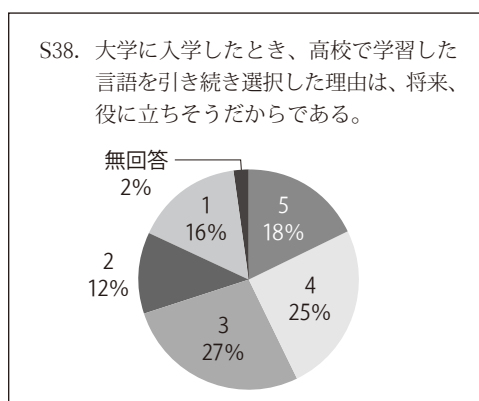


図61：役に立つ（独）

4.2.4.2 大学入学時の意識：学習を継続した理由の結果のまとめと考察

大学入学時の意識としては、フランス語同様、4技能すべてが重視されていることがわかった。

「会話」能力については、高校卒業時に習得できなかったと思っている学習者が多かったの
で、大学では習得したいという学習者が多いと考えられる。逆に、「読解」は、高校卒業時に
習得できたと回答した学習者が多く、高校での習得が学習者の自信となり、学習のモチベー
ションをあげている可能性があり、大学でもさらにその能力を向上させたいと考えているのだ
ろう。また、「文化への興味」に関しては、45%の学生が、ポジティブな解答をしている。

最後に、「役立つ」という理由について考察する。高校でも「役に立ちそう」とする回答は
少なかったが、大学でもその傾向は変わらない。また、フランス語と異なり、「役に立ちそう」
の値が「やさしそう」よりも低くなっている。ドイツ語は実用面ではあまり役に立つとはとら
えられていないようである。

4.2.5 学習環境改善のための提案

最後に、「6. 学習環境改善のための提案：テキスト」の結果を提示する。

4.2.5.1 学習環境改善のための提案：テキストの結果

テキストの一貫性の希望に関する結果に関しては、図62に記す。

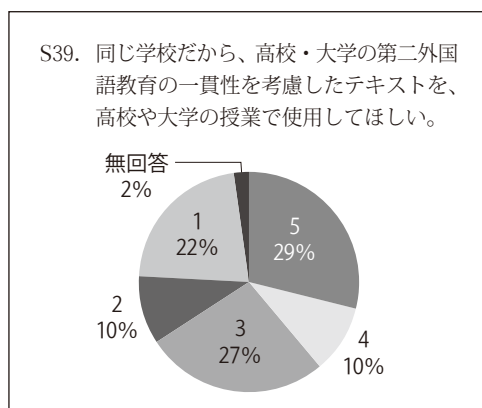


図62：教育の継続性の希望（独）

4.2.5.2 学習環境改善のための提案：テキストの結果のまとめと考察

フランス語の場合ほど、継続を希望している学生は多くない。この結果だけからでは、高校と大学が同じテキストを使うのが効果的なのかどうかについて、明確な判断を下すことはできない。

4.3 ドイツ語調査結果のまとめ

ここでは、以上で概観したアンケート調査結果に、フランス語、中国語、スペイン語の集計データもまじえて、ドイツ語に特有の傾向や他の言語との共通点を見ていこう。

4.3.1 ドイツ語選択の動機

ドイツ語選択の動機については4.2.2.1でも触れたが、語種ごとの集計結果でも、ドイツ語では上位10項目にS19（「高校で英語以外の外国語を選択した理由は、その言語が使用されている地域の文化に興味があったからである。」）が見られる。

表10：回答の上位10項目

ID		$\mu + \sigma$
S13	大学で既習者クラスがあったほうがよい。	5.24
S23	高校で英語以外の外国語を選択したとき、大学まで学習を継続するつもりだった。	5.23
S37	大学に入学したとき、高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、他の外国語を一から学習するよりやさしそうに思えたからである。	5.12
S34	大学に入学したとき、高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、会話・コミュニケーション能力をさらに高めたいと思ったからである。	5.00
S28	高校を卒業したとき、辞書を用いれば簡単な文を読む能力が身についた。	4.98
S35	大学に入学したとき、高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、聞き取る能力をさらに高めたいと思ったからである。	4.95
S17	自分の習熟度がわかるプログラムにそって勉強したい。	4.94
S19	高校で英語以外の外国語を選択した理由は、その言語が使用されている地域の文化に興味があったからである。	4.85
S33	大学に入学したとき、高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、書く能力をさらに高めたいと思ったからである。	4.75
S32	大学に入学したとき、高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、読む能力をさらに高めたいと思ったからである。	4.72

他の語種と比べてみると、高校入学時点での関心を問うS19は、中国語、スペイン語では下位の10項目に入っている。また、高校入学時における選択理由を見ると、文化に対する興味はドイツ語がフランス語よりもやや上になっている。

表11：上位項目の語種比較

	順位	ID		$\mu + \alpha$
ドイツ語	8	S19	文化への興味	4.85
フランス語	8	S18	他より興味深い	4.87
	10	S19	文化への興味	4.78
中国語	4	S21	役に立つ	5.13

ただし、この「文化」が哲学、文学、音楽等のいわゆる古典的な文化と、車やサッカーなどに象徴される現代社会の文化のどちらを指すのかは、この調査だけでは読み取ることができない。

しかし、S31（「高校を卒業したとき、学習した言語の国や文化について簡単な説明をする能力が身についた」）が下位の10項目に入っていることから、文化に対する関心は高いものの、その言語圏の文化について他人に説明できるほど身につけてはいない様子もうかがわれる。ただし、この場合の「国や文化について簡単な説明をする能力」を回答者がどのように理解しているかは気になるところではある。

表12：高校時に習得した下位項目

	順 位	ID		$\mu - \sigma$
大 学 全 体	2	S31	文化の説明	1.07
	3	S30	簡単な会話	1.08
ド イ ツ 語	5	S30	簡単な会話	1.09
	6	S31	文化の説明	1.32
フランス語	2	S30	簡単な会話	0.87
	3	S31	文化の説明	0.93
中 国 語	1	S31	文化の説明	1.09
	4	S30	簡単な会話	1.19
スペイン語	4	S31	文化の説明	1.20

一方、語種ごとの比較では、S38（「大学に入学したとき、高校で学習した言語を引き続き選択した理由は、将来、役に立ちそうだからである。」）は中国語が3位、スペイン語が10位に入っているが、ドイツ語、フランス語では上位10項目に入っていない。また、S21（「高校で英語以外の外国語を選択した理由は、他の外国語よりも役に立ちそうだからである」）が下位項目の第2位にあることから、高校でも「役立つ」ことには特に重きを置いていないことがうかがわれる。ただし、この「役立つ」ということをどのように理解したらよいかについては他の言語を含めた検討が必要であろう。

以上記した言語学習の動機づけとしての文化に対する関心と実用性の重視が言語によって異なる現れ方をするのは、本調査にロシア語と韓国・朝鮮語を加えた6言語の全国の学習者17000名余（うち1年生は約75%、ドイツ語の1年生は2700名余）を対象にした動機づけ調

査¹⁰⁾でも似たような結果が示されている。すなわち、ドイツ語では人文学、社会科学、教育学系の学部で特に内発的動機づけが高いという傾向が出ており、ほぼ本調査と近い結果と見ることができるのである。このあたりには、明治時代からどちらかというと教養のための外国語と目されることの多かったドイツ語とフランス語と、近年外国語教育の実用性を強調するようになってきた社会の要請とも合致して学習者が増え、重要性が増している中国語、スペイン語との違いが現れているものと考えられる。

4.3.2 ドイツ語学習における言語技能の習得

次に、言語技能の習得について回答者はどのようにとらえているのだろうか。高校入学時に英語以外の外国語を選択した理由として、S24（読む能力）、S25（書く能力）、S22（コミュニケーション）の値が下位の10項目に入っていることから、高校時代は特に読み、書き、話す能力の伸長を重視していたわけではないことがうかがわれる。つまり、初期動機はかならずしも4技能を身につけたいという欲求と連動していない。しかし、大学入学時の語種ごとの集計結果ではS34（会話・コミュニケーション能力）、S35（聞き取る能力）、S33（書く能力）、S32（読む能力）がいずれも上位10項目に入っている。

表13：大学入学時に学習継続を選択した理由・能力の上位項目

	順 位	ID		$\mu + \sigma$
大 学 全 体	3	S34	会話	5.10
	5	S35	リスニング	4.97
	8	S32	読解	4.92
	9	S33	ライティング	4.87
ド イ ツ 語	4	S34	会話	5.00
	6	S35	リスニング	4.95
	9	S33	ライティング	4.75
	10	S32	読解	4.72
フランス語	3	S34	会話	5.18
	4	S35	リスニング	5.05
	5	S32	読解	5.03
	7	S33	ライティング	4.99
中 国 語	5	S34	会話	5.06
	7	S35	リスニング	4.96
	9	S32	読解	4.90
	10	S33	ライティング	4.85
スペイン語	3	S34	会話	5.15

このことから、ドイツ語履修者とフランス語履修者は大学入学時点では地域の文化に対する関心も維持しつつ、高校で学んだドイツ語・フランス語を続ける理由として4技能を高めることに満遍なく関心を持っているようである。これは高校での学習を通じてある程度ドイツ語能力が身についたことを実感していることの現われと見てとることができる。実際、高校で英語以外の言語を学習した学生の回答で4つの語種に共通しているのが、「高校を卒業したとき、辞書を用いれば簡単な文を読む能力が身についた。」という回答（S28）である。ドイツ語は5位、フランス語は6位、中国語は8位、スペイン語は2位といずれも上位を占めている。つまり、高校での学習の結果、調査対象となった4言語の学習者は共通して「辞書を用いれば簡単な文を読む能力が身についた」と思っているのである。一方、「高校を卒業したとき、簡単な日常会話を当該言語母語話者とやりとりする能力が身についた。」（S30）は、スペイン

語以外の3言語では下位10項目に入っているから、高校での学習の成果は音声言語によるコミュニケーションにはまだ現れていないといえよう。

これらのことから、高校での学習の結果、辞書を使えば短い文を読む能力が身につく、大学での学習では音声言語によるコミュニケーション能力を身につけたいと考えている学習者像が見えてくる。高校での授業の時間数がそれほど多くないことを考えると、少ないながらも1、2年間の学習を経て「高校を卒業したとき、辞書を用いれば簡単な文を読む能力が身についた。」と感じられるようになり、そのうえで大学入学時には話す、聞く、書くといった他のスキルも身につけたいという動機を抱くようになるというプロセスは、一つの学習の道筋と考えてよいと思う。

4.4 ドイツ語一貫教育に関するまとめと考察

以上のデータから読み取れることとして肝心なのは、高大連携によってそのプロセスにある種の一貫性を持たせられるかどうかではなからうか。S13（「大学で既習者クラスがあったほうがよい」）が、フランス語の2位を除けばどの言語でも最上位にあるのは既習者クラスに対する調査なので、当然かもしれないが、S12（「高校と大学の授業で連携がとれている。」）が下位10項目に入っていることも考え合わせると、4言語の履修者はいずれも大学では既習者クラスがあった方がよいと思っているが、高校と大学の授業で連携が取れているとは思っていない様子が見えてくる。「同じ学校だから、高校・大学の第二外国語教育の一貫性を考慮したテキストを、高校や大学の授業で使用してほしい。」（S39）が、語種別上位・下位全項目表で比較的上位に位置していることも一教科書だけ同じものを使えばよいかは別として一高校と大学の連携が取れていないと感じている人が多いことを物語っている。

今回のアンケートは既習者に対するものなので、大学に入って高校とは別の外国語を履修した人の意見が含まれていない。ドイツ語でいえば、ドイツ語を続けなかった学生のやめた理由がわからない。したがって、あくまでもドイツ語を続けた学生の意見であることに留意する必要がある。だから、高校での学習に効果があったのか、大学で継続する動機づけになったのかは、厳密に言えば、多少割り引いて考えなくてはならない。

今後の課題としては、上で述べたように、高校、大学入学時における言語技能の習得に対する動機づけが異なることを踏まえて、高校と大学がどのように連携していけばよいのかという問題がある。また、高校での語種選択以前にドイツ語圏の文化に対する関心を喚起している要因は何かという点から中等教育での授業一般や、高校でのドイツ語の授業を観察するのも興味深いのではなからうか。

5. 結論

本稿は、フランス語、ドイツ語、中国語、スペイン語の4言語で行った調査結果から、フランス語とドイツ語の部分のみを抜き出して考察を加えたものである。

日本の高等教育で、長年第二外国語として教育が行われてきたこの二つの言語は、その成り立ちと歴史に共通項が多いため、学習と教育の実態において、中国語、スペイン語、韓国・朝鮮語、イタリア語などの「新しい第二外国語」とは相当程度性格を異にするのではないかと想像されたが、今回の調査において、言語選択理由という面ではそのことが一定程度裏づけられたと言えよう。

数字を通して見てみると、フランス語、ドイツ語ともに高校では簡単な「読解力」がついたと感じている学生がもっとも多いが、大学ではさらに、4技能全般を伸ばしたいと考えている学生が増加しているという傾向が分かった。

本アンケート調査では、学習者の初期動機に「文化」が果たす役割の大きさが改めて明らかにされた。しかし同時に、被験者たちは高等学校在籍中に、必ずしも十分な文化学習ができたとは思わないという意識を持っていることも明らかになった。もっとも、この「文化」というものを被験者たちがどのように捉えているかは、本調査では不明のままである。その解明は今後のさらなる（主に質的な）調査に委ねられるだろう。

また、高大言語教育の連携の必要性が強く意識されているにもかかわらず、それが必ずしも実現されているとは言えない実態も明らかになった。この点についても、具体的にどのような連携が必要か、さらなる調査・研究を継続したい。

学習者の要望も反映させつつ、より良いシステムを構築することは、教員たちが、学習者と協力して少しでも理想的な学習環境を作ることにつながり得る。このような形で、熱心な教員たちの日々の努力が結実することは、教員・学習者双方にとって望ましいことと言えよう。本調査研究を踏まえて、教員の交流を含めた、より良い環境を構築し、高大連携カリキュラム設計を進めていきたいと考えている。

注

- 1) 本調査は、科学研究費補助金（基盤研究 A）による研究「外国語一貫教育における複言語・複文化能力育成に関する研究」（2012年度から2014年度、代表：境一三）の一部として行われたものである。意識調査に協力して下さった被験者の方々に深く感謝いたします。また、アンケートの分析手法をご教示くださった酒井志延先生、データ分析の補助と資料の作成に携わってくださった高橋義彦さんに感謝の意を表します。
- 2) スペイン語部分については共同研究者の別の原稿が本論文集に掲載されている。また最終的には、中国語部分も包括した論考を発表する予定である。
- 3) 数字の前の S は、学生用のアンケートであることを示す。
- 4) 本節の（・・・）は、「高校で英語以外の外国語を選択した理由は、」の代わりとする。
- 5) 本節の（・・・）は、「高校での履修開始時、」の代わりとする。
- 6) 本節の（・・・）は、「高校を卒業したとき、」の代わりとする。
- 7) 本節の（・・・）は、「大学に入学したとき、」の代わりとする。
- 8) 上位10項目とは、S12～S41とS43の質問への回答を集計・計算した結果、「 $\mu + \sigma$ 」の値が高い順番の上位10項目を意味する。「S42. 指導している場合は、その内容をマークシート欄 E に記入してください。」は外した。本稿においては前出ではないS40、41、43の質問項目は次の通りである。「S40. 高校・大学の第二外国語の授業において、英語文法と比較しながら文法の説明をしたらわかりやすいと思う。」「S41. 性差別、人種差別、身体表現などの繊細な話題について対象言語で発言する際の注意事項を、教員が授業で指導している。」「S43. 対象言語で発言するときに国や文化的背景など、自分とは異なる他者に配慮した表現について、教員は授業で扱っている。」
- 9) ドイツ語は、回答者数（51）が、フランス語（120）、中国語（160）の各々2分の1弱、3分の1弱と少ない。他の語種との比較には多少の留保が必要であろう。
- 10) 「新しい言語教育観に基づいた複数の外国語教育で利用できる共通言語教育枠の総合研究」（2011年度～2014年度、日本学術振興会科学研究費補助金、課題番号：23242030 代表：西山教行）におけるアンケート調査。

参考文献

- 飯田年穂 (2010). 「複言語主義の視点から見た外国語分野での高大連携」. 『いかに21世紀の複言語能力を育てるか：中等教育における外国語』. 立花英裕他 (編著). 東京：朝日出版社.
- 北山研二 (2010). 「「フランス語を学ぶ」と「フランス語で学ぶ」—いかにして既習者に大学でフランス語を研究し続けるよう、あるいはフランス語で専門科目を研究するよう奨励すべきか」. 『いかに21世紀の複言語能力を育てるか：中等教育における外国語』. 立花英裕他 (編著). 東京：朝日出版社.
- Lee, Lina and Sylvie Debevec Henning (1999). 'Partners in Pedagogy: Collaborative Teaching for Beginning Foreign Language Classes'. In *Foreign Language Annals*, 32 (1): 125-134.
- 水林章 (2010). 「大学入試「英語」における「東大方式」という考え方—英語＋もうひとつの言語を！」. 『いかに21世紀の複言語能力を育てるか：中等教育における外国語』. 立花英裕他 (編著). 東京：朝日出版社.
- 田口哲男 (2013). 「高大連携—課題とその方策」. 『高大連携と能力形成』. 高崎経済大学産業研究所編. 東京：日本経済評論社.
- 山崎吉朗 (2010). 「中等教育における英語以外の語学教育の現状」. 『いかに21世紀の複言語能力を育てるか：中等教育における外国語』. 立花英裕他 (編著). 東京：朝日出版社.

口頭発表（本文中では言及していないが、参照したもの）

- 藤原三枝子・境一三・平高史也 (2014). 「大学におけるドイツ語学習者の動機と動機づけ—6言語を対象とした質問紙調査から」. 日本独文学会春季研究発表会. 麗澤大学.
- 治山純子・丸田千花子 (2014). 「慶應義塾の第二外国語教育における、高校・大学の連携に対する意識調査—フランス語教育に関するアンケート結果の報告—」. 日本フランス語教育学会. 2014年度春季大会. お茶の水女子大学.
- 境一三・丸田千花子・吉川龍生・治山純子 (2014). 「第二外国語科目（既習者クラス）における高校・大学連携に対する意識のアンケート調査について」. 言語教育エキスポ2014. 早稲田大学.
- 山下一夫・吉川龍生 (2014). 「慶應義塾の第二外国語教育における高校・大学の連携についての意識調査—中国語を中心に」. 中国語教育学会第12回全国大会. 大東文化大学.